

氏名	高 梨 吉 郎
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学位授与番号	乙 第 3 9 8 号
学位授与の日付	昭和44年12月31日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第5条第2項該当)
学位論文題目	口腔癌と歯科的誘因に関する研究
論文審査委員	教授 田 中 早 苗 教授 高 原 滋 夫 教授 小 川 勝 士

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

物理的発癌因子として考えられる義歯等各種歯科補綴物、歯牙の慢性機械的刺激と口腔癌との関係については、今までに從來系統的な研究はなく少数の臨床的報告をみるのみである。

著者は教室経験284例中、両者の間に密接な関連性をみとめた44例をもとに、この両者の関係を解明せんとして、臨床病理学的、剥離細胞学的観察を試みた。

1. 刺激因子である補綴物の装着期間は、最短期間5月、最長期間40年、平均7.9年であった。
2. 刺激の加わっていた期間は、最短期間20日、最長期間40年、平均3.7年であった。
3. 刺激因子としては全部床義歯(56.8%)が最も多かった。
4. 剥離細胞学的に慢性機械的刺激との関係の考えられた実験群と、その関係の考えられない対照群とを比較したところ、実験群の方が角化型腫瘍細胞がより多く発現する傾向がみられた。
5. 剥離細胞標本を用い腫瘍細胞の細胞形質面積(C)、核面積(N)、C/Nについて両群を比較した。その結果C、C/Nには有意差は認められず、Nについては実験群の方がやや小さかった。
6. 両群について更に組織学的に比較検討したところ、実験群の方が比較的悪性度が低く、所謂分化型の角化型扁平上皮癌が多い傾向が認められ、剥離細胞学的所見と一致した。

以上の結果から本研究は口腔癌原因の一端を示唆し、特に歯科補綴物作製時に、歯科医は口腔癌の予防を常に念頭におくべきことを示した。

論文審査の結果の要旨

本研究は、口腔癌と歯科的誘因に関する研究で口腔癌の発生原因とその原因となるべき義歯などの補綴物作製上の注意について、系統的な検索をすすめた新しい仕事で、この方面の新分野を開拓した価値ある業績であると認める。

よって本研究者は、医学博士の学位を得る資格があると認める。